けいおん ～もう一人の幼なじみ～

タカメン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん　～もう一人の幼なじみ～

【Ｎコード】
Ｎ７７９１Ｚ

【作者名】
タカメン

【あらすじ】
澪には幼なじみがもう一人いた！？
けいおんの二次創作です
初心者なので読みにくいですが頑張って行くのでよろしくお願いします
いろいろアドバイスを下さるとありがたいです
初めてなのでいろいろな先生の作品を参考にしています
とても更新は遅いです

基本設定（前書き）

一応作ってみました

基本設定

基本設定です

主人公
光明嵐（こうめいあらし）
身長１７５ｃｍ　体重６０ｋｇ
澪と律とは小学校からの幼なじみ主人公は澪に一目惚れしていて律はそのことを知っているそしてたまにアドバイスをもらっている律とは昔からの友達といった感じ

頭はそれなりよく数学と理科は澪よりいいが他は負けている
パートはベース
顔は少しほっそりしている
髪は基本黒だが少し茶色がかっている
顔のレベルは中の中ぐらい体格は細いが筋肉がある
走るのは速く器械体操や水泳はよく出来るが球技は全然ダメである
趣味は読書と音楽を聴くこととダラダラすること

基本設定（後書き）

これからどんどん足されて行くと思います
感想　アドバイスよろしくお願いします

第1音　入学式（前書き）

本編に入りました

アニメでやる少し前までです

第1音　入学式

暖かい春の日にゆっくり歩く男がいた

俺　光明　嵐である

この春より共学校になった桜ヶ丘高校に入学した高校1年生だ

「お～い、嵐～」

「律～待ってくれよ～　急に走り出すなよ～　　あっ嵐！」

向こうから走ってくる広いおでこがトレードマークの女子は幼なじみの　田井中　律だ

その少し後ろを走ってる背が高く黒髪の少し大人っぽい女子はこれまた幼なじみの　秋山　澪だ

「お～澪、オハヨー」

「なんで澪だけなんだよー」

「おはよう嵐、いや～一人で心細かったんだ～」

「って、澪まで！？　てゆーかさっきまで一緒に歩いてただろ～」

そんな感じで律をからかっていたら校門前に着いた

「よーし着いた～……どこに行けばいいんだっけ？」

「そんぐらい覚えておけよ……あそこの昇降口にきまってんだろ」

そして昇降口に着いた俺達はそれぞれのクラスを探した
光明だから、こ、こ、……1組みたいだ。澪達は？
「私は……2組だな！　澪は？」

「私も2組みたいだ」
マジかよ……
「嵐は？」

「……1組…」

「じゃあ嵐だけ違うのか～」

そして1組の前に着くと
「じゃあここでお別れだな　じゃあまたあとで」
すると律がいきなり寄ってきて

「愛しの澪ちゃんと別れて残念だなぁ　嵐？」
と小声で言ってきやがったので　デコピンをくらわせてやった

「いったいなー何すんだよ～」

「どーせまた律が変なこと言ったんだろ　ほら行くぞ　じゃあな～
嵐」と言って　行ってしまったそしてそのあと入学式がありそれが
終わったあと自己紹介等をして今日の授業（？）は終わった

そして最後に担任が

「クラブ見学は自由だ　今日行かなくても明日新入生歓迎会がある
から　それには出ろよ～」

と言っていた
多分澪は文芸部に入るだろうから入部届けは文芸部と書いておいた
多分俺と澪が入っていれば律も入るだろうと思っていた

しかし次の日それは甘かったことに気づいた

第1音　入学式（後書き）

皆さんのご意見やアドバイス、リクエストには出来るだけ答えて行きたいのでよろしくお願いします

第2音　廃部（前書き）

やっとアニメ本編に入りました

唯は次回には登場できる予定です

第2音　廃部

次の日

俺はかったるい新入生歓迎会に強制的に行かされた

感想はあまりないがあの中でやっぱり澪が入るとしたら文芸部だろう　先輩優しそうだったし

あと元女子高だけあって運動部が少ない

だから今年出来た部活もいくつかあるみたいだ

それに今年新入生が入らなかったら廃部なんていう部活もあるみたいだ

まあそんなことはほっといて早く入部届けを出しに行くとしよう

すると職員室で聞いたことのあるアホみたいな声が聞こえてきた

「けいおん部って廃部になっちゃったんですか？」

「ええ、正確に言うと廃部寸前ね今月中に4人入らないと廃部になっちゃうの　去年は3年生がいたんだけど……」

どうやら律がさっき新歓で言ってた部活に入ろうとしていたようだ

「律何やってんだよ～さっきの新歓の話し聞いてたのかよ？って澪はなんでここにいるの？」

「ああ　、嵐聞いてくれよ律のやつ私が文芸部入部届け書いたらそれを破いたんだ」

俺は一瞬怒りが湧いたが澪の　しょうがないな　って顔を見ると不思議と怒りがおさまった

「でももう廃部したんだったらいいだろ　ほら、律いつまで立ってるんだよ早く行「もしかしてこれはチャンス？」…はあぁ！？」

「今入部したら私が部長……悪くない……」

「律、何言ってんだよ～？」

「よーしそうと決まったらさっそくあと一人入部希望者を集めるぞ～」

「はぁ！？いきなり何言いだすんだよ？だいたい４人必要だからあと３人だろ？」

「？」

いやそんな　何言ってんだコイツ？　みたいな目で見られても……

「嵐…もう現実から目を背けるのばやめよう　律がこう言い出したら止まらないだろ」

律のアホめ……

そして俺達は音楽室で入部希望者を待っていた

……来るのかなあ？

ガチャ

「あのー入部希望なんですけど」

そこにはいかにもお嬢様っぽい金髪の女子が立っていた

「けいおん部に！？」

「いえ、合唱部…「けいおん部にしてください」はい？」

「おい律強引に誘うなよ」

「そうだぞ、　やっぱり私も他の部活に行くよ」

「えー、澪ー嵐ーやろうよ　約束しただろ「「してない」」　でも〜」

澪が行くならそろそろ俺も……

「楽しそうな部活ですね私キーボードぐらいしか出来ませんけど入部しても良いですか？」

もちろん承諾していまここに新しく誕生した

第3音　入部（前書き）

唯が入部します

作者がけいおんを熟知してる訳じゃないのでアニメとはいくつか違うところがあったり抜けてる部分がありますが大目に見てください

第3音　入部

けいおん部が出来て数日後俺達はさっそく練習をするのかと思いきやなぜか部室で紅茶を飲んでいた……

「おかわりいかがですか～？　あとケーキもありますよ～」

しかもそれはあの日来た　金髪の女子　琴吹　紬　が家からもってきたものだ

スゲーうまい。しかもカップも超高そうなティーカップだし

「こんな高そうなもの良いのか？ムギ？」

澪はいつの間にか琴吹のことをムギとか呼んでるし
あいつはいったい何者なんだろう？

「良いのよ～家からあまってるお菓子とか持ってきてるだけだし」

追加
あんな高そうなものが余ってるなんて本当に何者なんだろう？

ガチャ
「お～いけいおん部に新しい部員が入るみたいだぞ～」
するといきなり律が入って来た

「いきなりどうしたんだよ？」

「聞いてくれ　さっき文化部を管理している先生から聞いたんだけどな～　朝けいおん部に入部届けを出しに来た生徒がいたんだって～　多分もうすぐで来るはずなんだ」

「ふーん」
「全然嵐は興味なさそうだな」

しかしいっこうに入部希望者は現れない

「俺　教室に忘れ物したから行ってくる」

「なんだよ結局嵐も気になるんじゃないか～」

アホがなんか言ってきたけど無視！

コツ
「そういうことを言うんじゃない！！」

どうやら澪がデコピンをやってくれたみたいだ

やっぱり澪優しいなあ

「嵐は照れ屋なんだから！！」

……聞こえなかったことにしよう……

ドアを出るとすぐそこにドジそうな茶髪の女子がいた

さっき言ってた子だと思い声をかけてみた

「ねえ、君がもしかして入部希望者？」

少し笑顔で聞いてみた

「ひぃぃぃーー」

なんで声かけてただけでこんなに怖がられるんだろう？

「あっ、ごめんなさいちょっとちがうこと考えてて」

「君入部希望なんでしょ　ひとまず入りなよ」

俺は気力を絞りその言葉を言った

「入部希望者だぞー……」

「おおぉーようこそ～ってなんでそんな嵐落ち込んでんだよ？」

俺そこまで顔ひどくないと思ってたんだけどなぁ実際はそうなのかなぁ？

「まあいいや　ムギお茶の準備だ！」

「あ、あの　えっと、」

俺の落ち込みを１０秒で片付けた部長　と何かいいたげな茶髪

何かいいたげな顔してるけどどうしたんだろう？

思った以上にひどかったとかかな？

どちらにしろコイツはせっかくの部員（獲物）なんだから逃がしちゃダメだな

「まあとりあえず座りなよ、　えっと……？」

「あ、私平沢　唯です」

「よろしく平沢さん。　まあとりあえず琴吹さんの紅茶飲んでみてよ
美味しいから」

そういうとゆっくり飲みはじめた
そして幸せそうな顔をする平沢さん

「嵐　、いつもと感じ違くないか？　」

どうやら澪たちはまだ気づいてないようだ

「平沢さんなんか手応えが良くない。　部費のためにもここは逃したらダメだ」と小声で言った

「平沢さんはなんでこの部に入ろうと思ったの？」

音楽に興味があるなら食いつくはずだ

しかし……

「えっと軽い音楽って書いてあったんで口笛とかかと思ってて」

マジかよ……少なくとも口笛はないと思うぞ

「じゃあどんな楽器なら出来る？」

ナイス律！これはどうだ？

「カ、カスタネッじゃなくてハ、ハーモニカ！」

最初カスタネットって言ったぞ。　これは嘘だろ

「ハーモニカならあるから吹いてみ「ごめんなさい吹けません！」

やっぱり……

「あ、あの、今日ここに来たのはここに入るの辞めさせてくださいって言いに来たんです！」

マジかよ！！

最初の表情はそういうことだったのか　多分もう無理だな。

「そんなこと言わずにねえお願いだよ～　平沢さ～ん　毎日お茶するだけで良いから～」

「おい律もう無理に誘うな悪い印象が付くだろ」

「そうだぞ律　嵐の言う通りだ」

「でも～」

そんなふうに言い争っているととうとう泣き出してしまった

平沢さんが……

「こんなに迷惑かけてしまって本当にどうしたら良いか……軽い気持ちで書いてしまって　本当にごめんなさい」

まるで子供が泣き出すように大粒の涙を流していた

「じゃあ俺達の演奏だけでも聞いて行ってくれ」

「演奏してくれるの！？」

……めっちゃ食いついた

そんなこんなで演奏することになった

曲名は「翼を下さい」だ

あの結成した日からそんなに日が経っていなかったが　それなりにうまく出来た

そして平沢さんの様子は……

キラキラキラ

すごい笑顔だった

「どうでしたか？」

「あの、うまく言葉に出来ないんですけど　あんまりうまくないですね！！」

今律が心の中で「バッサリだー」と行ったような気がした

「でもすごい感動しました！私この部に入部します！」

そうして新しく平沢さんを加えたけいおん部はやっとスタートラインにたったのであった

第3音　入部（後書き）

やっとアニメ1話が終わりました

これからは1話1話を長く出来るようがんばります

第４音　楽器！（前書き）

アニメ２話目です

あけましておめでとうございます

こんな小説ですがことしもよろしくお願いいたします

第４音　楽器！

とうとう（やっと）けいおん部がスタートした

スタートした次の日　俺は少し早く部室に行こうとしたしかしその日は掃除当番だったので３０分ほど遅れてしまった

今日からけいおん部が始まると思うとワクワクして授業中も眠れなかった！

いざドアを開けて見ると……

、

いつもどうりティータイムをしていた……

「ヤッホー　嵐遅いぞ～」

ゴン！

「何すんだよいったいな～」

「遅いのはおめーらだろもうとっくに練習始めてるもんだと思ってたわ！」

「ゴメン嵐、私は止めようと思ったんだけど……」

澪が止めようとしたらしいけど無理だったみたいだ。まあ止めよう

としてくれただけありがたいけど

「まあまあコウくん落ち着いて～」

なぜか平沢は俺のことをコウくんと呼ぶようになった　ちなみに琴吹は嵐くんである

「っていうかおまえギターは？」

「ああそっか。私ギターやるんだっけ」

そこからかよ意識すらないなんて……いやここに入ったことを覚えてるだけマシか

多分それは俺達の演奏が大きかったと思う

あの時は

俺と澪がベースで律がドラム　、琴吹がキーボードだったのでギターがなく迫力に欠ける感じだったが　なんとかイケた

しかしやはりギターは必要なので平沢が入ってくれて本当に助かった

だから少し期待していたが平沢はギター初心者だからギターを持っていないことを忘れていた

「ねぇ、　ギターっていくらぐらいするの？」
「安いやつは1万台からだな、だけどあんまり安すぎても良くないから5万ぐらいがちょうど良いな」
「部費で落ちませんか？」
平沢が満面の笑顔で聞くと
「落ちません！」
すると律も満面の笑みで反した
「どうしよう私のお小遣１０ヶ月分だよ～」
まあこればっかりはしょうがない
「よし！お金はなんとかするから週末買いに行こう！だけどどんなのが良いの？」
「口で教えるのめんどくせーから俺も一緒にいくよ　ちょうど買いたいものあったし」
「じゃあ今度の土曜日皆で唯のギターを買いに行こー」
「けいおん部として動くのはこれが最初だな」
「私こういうのにあこがれていたの～楽しみ～」

次の土曜

駅前に行くと澪達が待っていた　平沢がブンブンと両手を振っている
どうやら一番最後みたいだ

「コウく～ん、早く～」

恥ずいから止めて欲しいなあ。でも言っても意味ないということが
わかってきたから言わないけど

「で、どこの店に行くんだっけ？」

「あ、それはね～こっちだよ～」

そう言われ俺達は平沢が案内する楽器店に入っていった

途中いろいろな誘惑に律や平沢が負けそうになってたがなんとかこ
こまで連れてきた

「5万のギターだったらあっちの方「わ～このギターかわいい～」
聞いちゃいねえし……」

平沢が一目惚れしたギターはネックが太く重い女子にはキツイもの
だった
（作者が楽器の知識がないので詳しい説明は出来ません）

「そんなの女子には無理だって　しかもそれ２５万もするじゃん」

「ほんとだ～じゃああきらめるよ……」

あきらめると言っているもののその目はじっとそのギターを見つめている

すると律が
「よしじゃあ皆でバイトするか　唯の楽器を買うために
やるぞ～「「オー」」」

律達が大きく拳を突き出した

俺は当然やらなかった
澪もそうだろうと思い見てみると小さく上げていた
今までの澪だったらしていなかっただろうがけいおん部に入って変わった、いや変わろうとしているのかもしれない

そして皆上げていて、しかも期待を込めた目で見つめて来るので仕方なく俺も拳を突き出した

第４音　楽器！（後書き）

作者に文才がないので主人公と澪　澪と律の書き分けがうまく出来ませんアドバイスをいただけるとうれしいです

あと澪がヒロインの話なのに澪があまり会話の中心にいないのとムギが空気になってしまいました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7791z/

けいおん ～もう一人の幼なじみ～

2012年1月1日01時48分発行